五台山「一万文殊」像から蓮華王院千体千手観音菩薩像へ

佐々木守俊

はじめに

平成二十六年度岡山大学文学部プロジェクト研究「〈貧困社会〉概念とその実態に関する学際的研究」では、文学部公開講座「〈貧困社会〉への多様なアプローチ」と題する市民向け連続講座を、同年九月三十日より五週にわたっておこなった。筆者は第一回の「〈貧困社会〉救済事業としての文殊菩薩像造立」を担当し、貧者や病者を救済する文殊菩薩の信仰と造像の系譜についてのべた。当日はおもに鎌倉時代の仏像をとりあげたが、信仰の源泉となった経典や、中国の説話にも言及するなかで、五台山（中国山西省）の文殊信仰が、平安時代彫刻史にも少なからず影響をおよぼしている可能性を考察する必要性を感じた。そこで本稿では、三十三間堂の名で知られる蓮華王院本堂（現在は妙法院が管理）の千体千手観音菩薩像に代表される大量造像について、五台山文殊信仰を起点として検討してみたい。

蓮華王院本堂は、後白河上皇（一一二七～九二）の御願を受けた平清盛（一一一八～八一）によって建立され、長寛二年（一一六四）十二月十七日に供養された[1]。安置されたのは、中尊の千手観音坐像、そして千一体におよぶ等身千手観音立像である（図1）。平安時代後期には百体以上、ときには千体におよぶ同一の尊種の仏像を、一堂にならべる造像がしばしばおこなわれた。こうした造像は、「数量功徳主義」にもとづく現象とみなされることが多い。だが、平安時代人は数多くの仏像を造ることじたいを目的としていたのだろうか。

近年、平安後期の大量造像の契機や意義は、宋代の信仰との関連という観点から再考されている。とくに注目されるのが、清涼

図1　千手観音菩薩立像(160号)　妙法院蔵

寺釈迦如来立像の請来者として名高い奝然（九三八～一〇一六）が伝えた、五台山の「一万文殊」にかんする情報と、十一世紀以降さかんになる、同一尊の仏像の大量造像の関連を示唆する、奥健夫氏の指摘である[2]。本稿では奥氏の指摘にみちびかれながら、奝然との交流が知られる藤原道隆（九五三～九五）と藤原実資（九五七～一〇四六）が、それぞれ同一尊の画像を一万体制作していることに注目し、最初期の大量造像として理解する。続いて、道隆・実資以降の展開を追いながら、大量造像の歴史における蓮華王院像の位置づけをこころみる。さらに、像内に納入された摺仏の図像や表現を検討し、後白河による宋風受容という視点から蓮華王院像造立の意義をとらえてみたい。

一、奝然と五台山「一万文殊」像

蓮華王院像はさまざまに論じられてきたが、そのなかで、数量の問題をとりあげたおもな論考を挙げておこう。

田中教忠氏は、蓮華王院創建当時から近世にいたる多くの史料に加え、後白河の父・鳥羽上皇（一一〇三～五六）の御願によって、清盛の父・忠盛（一〇九六～一一五三）が長承元年（一一三二）に白河の地に造営した、得長寿院にかんする史料を収集した[3]。得長寿院は桁行三十三間という長大な堂宇で、中尊の丈六聖観音像と千体聖観音立像を安置していた[4]。堂宇の規模と千体像の安置というふたつの点で、得長寿院は蓮華王院の先駆といえ、田中氏は早くもそのことに注目していたのだった。

丸尾彰三郎氏は蓮華王院の千体造像の先例として、得長寿院像とともに、やはり白河の千体阿弥陀如来像を挙げている[5]。この像は、鳥羽が生前に造立に着手し、平治元年（一一五九）に後白河が清盛の造進によって千体を完成するとともに、堂を建立したものである。後白河御願の蓮華王院像を、父の鳥羽による二件の千体造像からの系譜に位置づける視点は、多くの研究者に継承されている[6]。

蓮華王院の大量造像を論ずるさい、つねに言及されるのが、速水侑氏による「数量功徳主義」というみかたである[7]。これは、仏像の法量や員数、密教修法の壇の数など、数量の多寡で功徳をはかる信仰だが、その根底には、なんらかの必然性が求められていたと考えられる。毛利久氏は蓮華王院像にふれるさい、ぼうだいな造像や反復的な念仏などの多数作善は、「仏教本来のもので、インドや中国においての同様の事実をあげることは困難でない」との見解をしめす[8]。簡潔な指摘だが、平安後期の仏教信仰と国外の動向の類似性への着目は、近年の上川通夫氏による、平安後期の数量功徳主義は「北宋風の疑似性」を意味する、との指摘[9]にも通じ、興味深い。

蓮華王院像への視線を一変させたのが奥健夫氏である[10]。氏は奝然の事蹟についてのべるなかで、『続左丞抄』所収の永延二年（九八八）二月八日の官符案をとりあげた。本史料は、奝然にかんする研究ではつねに注目されてきたが、美術史研究上においても重要な記述を含んでいるため、あらためて該当箇所を引用しよう[11]。

（前略）抑寔雖致巡礼伝法□功、未遂財施供養□□、帰朝之後、雖

馳願心於五台清涼之雲山、繫供養於一万文殊之真容、未遂件願心、因之差嘉因法師、（後略）

奫然は永観元年（九八三）に渡宋、寛和二年（九八六）の帰朝にあたり現在の清涼寺釈迦如来立像、北宋皇帝太宗から下賜された勅版一切経などを請来、翌年にはそれらをたずさえ入洛した。さらに翌年の永延二年（九八八）には、弟子の嘉因を再渡宋させている[12]。その目的のひとつが、五台山の「一万文殊之真容」への施財供養だったという。奥氏は、「一万文殊」に向けられた奫然の信仰に注目し、万寿四年（一〇二七）の法成寺釈迦堂釈迦如来像を嚆矢とする、「同形像を大量に造像して一堂に安置する風習が宋よりもたらされた可能性を示唆する」という、重要な提言をおこなったのである。この指摘は、平安後期の大量造像が宋風受容の観点からも検証の価値があるという、あたらしい視点を提示した点で、おおいに注目される。

五台山は文殊菩薩の住まう清涼山に比定された聖地で、円仁（七九四～八六四）や奫然ら、入唐・入宋僧が篤い信仰を寄せた。東晋の仏馱跋陀羅（三五九～四二九）訳『大方広仏華厳経』（通称『六十華厳』）「菩薩住処品」は、「東北方有菩薩住処、名清涼山、過去諸菩薩常於中住。彼現菩薩、名文殊師利。有一万菩薩眷属、常為説法。」[13]、また、唐の実叉難陀（六五二～七一〇）訳『大方広仏華厳経』（通称『八十華厳』）「諸菩薩住処品」は、「東北方有処。名清涼山。従昔已来。諸菩薩衆。於中止住。現有菩薩。名文殊師利。与其眷属。諸菩薩衆。一万人俱。常在其中。」[14]とのべる。すなわち、清涼山には文殊菩薩が眷属の菩薩一万人とともに住んでいるというのである[15]。この世の清涼山と目された五台山にもまた、文殊と眷属たちが住んでいると信じられた。敦煌莫高窟第六十一窟壁画（五代）の五台山図には、「万菩薩楼」が描かれている（図2）。建物のまわりの、十六体の合掌する菩薩たちは、安置された一万の眷属像を意味すると思われる[16]。また、画面最上部の雲に乗る菩薩たちも、おなじく一万の眷属と考えられている[17]。

図2　敦煌莫高窟第61窟　五台山図　万菩薩楼

奥氏は、奫然の施財の対象について、志磐（生没年不詳）撰『仏祖統記』に記載される、北宋・太平興国五年（九八〇）に太宗が造らせ、五台山の「真容院」に安置した「金銅文殊万菩薩像」[18]を想定している。『奫然入宋求法巡礼行並瑞像造立記』[19]によれば、奫然は雍熙元年（九八四）四月七日に五台山大花厳寺真容院を訪れている。このさいに奫然は「金銅文殊万菩薩像」を拝した可能性が高い。

ところで、奝然のいう「一万文殊之真容」が「一万体の文殊像」と解釈できるのにたいし、『六十華厳』に説く「一万菩薩眷属」、そして『八十華厳』に説く「眷属諸菩薩衆一万人」が、文字どおり「（文殊菩薩に従う）一万人の眷属」を意味するとみられることは注意を要する。『仏祖統記』にいう「金銅文殊万菩薩像」も、「金銅製の文殊像と一万体の菩薩像」の意味と解釈され、中国側の通念はあくまでも、文殊と眷属菩薩を区別していたことがわかる。もっとも、「一万文殊之真容」は「五台清涼之雲山」と対にされており、語調をととのえるために選ばれた用語とみる余地もある。奝然がどのように認識していたかは不明だが、「一万体の文殊像」という解釈が可能な文言があってこそ、平安後期の同一尊の大量造像がなりたったのではないだろうか[20]。この問題については、のちにまた考察を加えたい。

二、十世紀末～十一世紀初頭の一万体画像制作

泉武夫氏と上川通夫氏は、平安時代後期の大量造像にかんする史料を博捜し、その意義を検証している。泉氏は、個人蔵千体愛染図巻について論ずるなかで、愛染信仰がさかんになる後三条朝から平安末期にいたる年代（一〇七七～一一七一）の大量造像の事例を多く収集した[21]。上川氏は、考察の対象とする年代を、鳥羽上皇中宮・待賢門院藤原璋子（一一〇一～四五）の御産御祈が続いた大治年間（一一二六～三一）に絞り、驚くべき頻度で大量造像がくりかえされた事実を指摘した[22]。両氏の考察は、大治年間を大量造像のピークとみる点で共通するが、本稿では事例収集の対象とする年代を平安時代全体に広げてみたい（年表）。すると、奝然帰朝の記憶がさめやらぬ十世紀末から十一世紀初頭にかけて、きわめて興味深い事例がみいだされるのである。

まず注目したいのは、関白藤原道隆による一万体釈迦如来画像の供養である。『門葉記』には、このさいの願文がおさめられている[23]。

敬白
奉造写供養仏堂経王事
右先公入道大相国以忠事君、以信帰仏。雖推赤誠而無二心。更分精神而発大願矣。即卜勝地以立道場。積善寺是也。（中略）奉図一万体之尊容。奉写大小乗之妙典。（中略）
正暦五年二月二十日
弟子関白正二位藤原朝臣道隆敬白
作者従二位藤原朝臣有国

積善寺は、道隆が父・兼家（九二九～九〇）の法興院のなかに造営した寺である。正暦五年（九九四）二月十七日、積善寺は道隆の奏請により、一条天皇の御願寺とされた。そして、「一万体の尊容」が「図し奉」られ、かつ「大小乗の妙典」（一切経）が「写し奉」られて、同月二十日に供養されたのである[24]。『扶桑略記』同日条には「図絵釈迦一万体」[25]とあり、一万体の釈迦像が「図絵」されたことがわかる。

積善寺一切経供養のはなやかなありさまは、『枕草子』第二六三段

に異例の長文でのべられている[26]。一万体釈迦画像と一切経は、そうした晴れの場で供養されたのである。道隆は永祚元年（九八九）二月二十三日に内大臣に任ぜられ（『日本紀略』ほか）、正暦元年一月二十五日には娘の定子が一条天皇に入内する（『日本紀略』ほか）。同年五月十三日には氏長者（『公卿補任』[27]）、二十六日には摂政となっている（『公卿補任』、『日本紀略』）。正暦四年三月二十七日には、二女の原子が東宮居貞親王（のちの三条天皇）に入内（『小右記』[28]）、四月二十二日には関白となる（『公卿補任』、『日本紀略』）。そして、正暦五年二月十七日には積善寺の御願寺化を果たし、二十日の一万体釈迦画像および一切経の供養にいたった。正暦年間は道隆の全盛期であり、それを象徴するのが積善寺供養だった。道隆は翌長徳元年（九九五）に没するので、その直前の印象的なできごとだったといえる。

正暦二年六月三日、道隆は、嘉因が宋から請来した文殊菩薩像を、自邸の東三条殿に迎えている[29]。この像は、のちに道隆の弟の道長（九六六～一〇二七）の子・頼通（九九二～一〇七四）の手に渡り、宇治の平等院経蔵に安置されたが[30]、道隆と奝然の関係をしめす像として注目される。積善寺の一万体釈迦画像供養は、道隆邸への文殊像安置の三年後におこなわれた。「一万文殊之真容」への施財という任務を奝然から託された嘉因、もしくは奝然本人から、五台山における大量造像の情報が道隆にもたらされ、一万体釈迦画像の制作をうながしたと考えることはできないだろうか。

十世紀末～十一世紀の摂関家による一切経の書写や供養は、奝然請来の「蜀版」として名高い勅版一切経の所有との関係があったことを、上川通夫氏は論じている[31]。積善寺の一切経供養は時期的にみて、奝然の勅版一切経請来の刺激によるものと考えられる。これと同時に供養された一万体釈迦画像もまた、奝然の影響下に制作された可能性がありえるだろう。その実態は不明だが、大量造像がいまだ広範に流行した形跡がみられない時期だけに、彫像と画像とのちがいを考慮してもなお、一万というぼうだいな数の一致は偶然とは思われない。

道隆にやや遅れて一万体造像をおこなったのが、藤原実資である。実資の日記『小右記』には、三件の大量造像がしるされている[32]。まずは、奝然の帰朝後まもない永祚元年八月十九日の、「小児等身百躰不動尊像」の制作がある。不動像は「画手」が制作にあたり、「東対母屋・庇合八間」に「懸け奉」ったというから、画像であることがわかる。そして、寛弘二年（一〇〇五）三月二十二日、実資は七箇日を限った不動息災法を修させ、新たに「一万不動尊」を「図絵」した。さらに、治安三年（一〇二三）閏九月十八日には、さきに「所労除念（愈カ）」のために発願した「一万躰薬師如来」を造像している。この薬師像が彫像か画像かはあきらかでないが、「今日顕し奉」ったとの記述からは一日で完成された形跡がよみとれ、やはり画像とみるべきと思われる。

道隆邸には嘉因請来の文殊像が安置されていた。また、実資は奝然の行動をしばしば『小右記』に記録している。永延元年六月八日条には、大雨で帰寺不能になった奝然が実資邸に泊まったとの記事があり、親密な交流が知られる[33]。奝然と道隆・実資の関係は、奝然の入宋前にさかのぼる。清涼寺釈迦像に納入された「奝然繋念人交名帳」には、奝然の入宋を後援した人々の名がしるされている[34]。そこには道隆と

実資も含まれており、帰朝後の奝然から「一万文殊」の情報を入手できるだけの関係を築いていたと思われる。

なお、一万体造像ではないが、寛弘七年三月二十一日には、「皮聖」こと行円（生没年不詳）が行願寺で「三千余体仏像」を「図絵」している[35]。道長は同日、行円に布施しているが、造像されたのは「千躰仏云々」と『御堂関白記』にしるしている[36]。ふたつの記事を総合すると、行円が制作したのは千仏図、または三千仏図だった可能性が考えられる。千仏思想にもとづく造像であれば、五台山「一万文殊」との直接の関連はみいだしにくいが、道隆や実資と同時代の大量造像として注目しておきたい。

行円の千仏（三千仏）画像制作も含めたこれらの事蹟は、十世紀末～十一世紀初頭が同一尊の大量造像の歴史の転換期だったことをものがたる。その起点を、寛和二年の奝然の帰朝、および五台山「一万文殊」（真容院の金銅文殊万菩薩像）の情報の到来とみなすことは、奝然と道隆・実資の関係から妥当と思われる。

三、道隆・実資以降の動向

実資の一万体薬師像制作にやや遅れ、道長は万寿四年に法成寺で二件の百体造像をおこなった[37]。ひとつは、五月三日に阿弥陀堂で供養された、等身不動明王の「絵像」である。続いて、八月二十三日には釈迦堂の釈迦如来像が供養された。本像は彫像による最初期の大量造像として知られ、中尊は丈六像、他の百体は等身像だった。この構成は、のちの得長寿院像や蓮華王院像にうけつがれてゆく。

道長の一万体造像は知られていないが、子の頼通の時代には、じつに五万体もの天部画像が制作されている。その契機は、妹の後一条天皇中宮・藤原威子（九九九～一〇三六）の御産御祈だった。『左経記』万寿五年（長元元年、一〇二八）七月一日条をみよう（〈　〉内は割注）[38]。

（前略）叉令行四天王供、東方、〈斉祇闍梨、〉南方、〈仁海僧都、〉西方、〈延尋律師、〉料各四石八斗、但仁海六石四斗、油各一升五合、叉令仁海供加利天、料物油如前、（中略）御願成就件件五天各一万体可奉書供之由有御願、件天等始従寅刻奉顕御等身、〈料各三石、〉送師房、（後略）

この日は四天王供があり、「雨僧正」の異名で著名な仁海（九五一～一〇四六）が南方尊を担当しつつ、「加利天」（訶梨帝母）の供養もおこなっている。そして、「五天各一万体」を「書き奉るべし」との後一条天皇の御願があった。以上の経緯より、「五天」とは四天王と訶梨帝母であることが判明する。これらの五天は寅の刻より「御等身」像としてあらわされたという。

同月九日、頼通は法成寺薬師堂で薬師経と観音経を転読させ、「宮の御産の事を祈請」させている[39]。威子の父・道長は前年に没し、頼通は摂関家の中心にあった。五万体天部画像の制作も、頼通の関与によって実現したと考えられる。頼通の周辺で大規模造像がおこなわれた事実は、奝然請来の勅版一切経のゆくえと関連するのではないだろうか。

寛仁二年（一〇一八）、道長は勅版一切経を手中におさめ、三年後の治安元年八月一日には法成寺の経蔵におさめた[40]。道長の没後、勅版一切経は頼通に継承され、天喜六年（一〇五八）の法成寺焼失まで存在していたとみられる。五万体天部画像制作の時点で、頼通は勅版一切経の保持者だったのである。上川通夫氏のいうように、北宋で刊行された勅版一切経の所有が「外交上の主導性」をしめし、それによって「国政領導の正統権威性」が根拠づけられていたならば[41]、道隆によって一切経の対概念のごとく位置づけられていた一万体造像についても、頼通は摂関家の特権の発露と認識していたのかもしれない。

ところで、天皇御願像にして、ときの関白頼通の威信を賭けた造像だったとはいえ、五万体もの等身の画像を供養することはそうとうに困難と思われる。この問題を考えるうえで、泉武夫氏が注目する、『水左記』の記事は重要である。承保四年（一〇七七）八月十九・二十日に源俊房（一〇三五～一一二一）が描かせた十一面観音と延命菩薩の画像は、いずれも「一搩手半（筆者註・一尺二寸または一尺三寸）像一体」を画面中央に、「三千余体」の「大一寸許」の像を周囲に配したものだったという。同月三十日には、延命菩薩像がさらに六千余体供養され、総数は一万体に達した[42]。五天像もまた、中尊のみ等身像だった可能性を考える余地があるだろう。

『水左記』にいう図様を類推する手がかりとして、泉氏は広隆寺三千仏図を挙げている。このほか、室生寺金堂の伝帝釈天曼荼羅は、九世紀にさかのぼる古例として注目される。また、興福寺国宝館千手観音菩薩立像の像内に納入されていた毘沙門天画像は、画面中央に長方形の区画をもうけ、おおきめの像を着彩で描き、周囲に印仏を多数捺しならべている。本画像は鎌倉時代に降る作例で、尊像の数も少ないが、うしなわれた平安期の絵画作例の形式をしのぶ一例といえるだろう。

頼通の曾孫・藤原忠実（一〇七八～一一六二）によって、長治二年（一一〇五）に造像された愛染明王像は、彫像と絵画のくみあわせによる一万体造像である。七月七日、忠実は「半丈六愛染王」の制作をはじめるとともに、「万躰同仏」を「図絵」した。そして十月十六日には、院派仏師の祖・院助（？～一一〇八）が「愛染王半丈六御首」を忠実に渡しており、この像が彫像と判明する。同日、絵仏師範順が「万体愛染王」を渡している[43]。画像の法量は不明だが、半丈六の彫像にたいし、補助的な存在だったと想像される。この点は、『水左記』の十一面観音像や延命菩薩像と通じる。

同一尊の像に大小の差をつけて大量に造像する方法は、斎然による「一万体の文殊」という発想と、『華厳経』や『仏祖統記』にみる「文殊菩薩と一万の眷属」という発想を兼ねるものではないだろうか。ひときわおおきな中尊にたいし、周囲の小像は「眷属」と呼びうる存在である。かつ、すべてが同一尊である点は「一万文殊」の文言と一致する。ふたつの解釈を折衷すると、『水左記』や『殿暦』にみるような造像が実現することになるだろう。

この形式にのっとった彫像作例が、法成寺釈迦堂の百体釈迦像や、得長寿院と蓮華王院の千体観音像である。大治年間前後は大量造像のピークで、なかでも大治四年七月十八日に待賢門院が供養した不動明王千体画像は、最終的に一万体をめざすものだった[44]。ただし、千体

を超える彫像の造立は、制作手段や安置場所の確保が課題となるせいか、非常に少ない。その状況にあって、長承元年の得長寿院千体聖観音像は特筆される。すでに多くの指摘があるとおり、蓮華王院像はこの得長寿院像を前提に成立したと考えられる。

蓮華王院像の当初の中尊の規模は不明である。だが、現存する再興像が、髪際で二五六・八センチ（八尺三寸四分）をはかる[45]丈六像であることから、おなじく丈六像だったとみてさしつかえないだろう。他の千体が等身像だったことは、現存する当初像からあきらかである。これにさきだつ平治元年、後白河は白河千体阿弥陀堂を造営し[46]、また安元二年（一一七六）には法住寺御所の東南の山上に持仏堂を建立、千一体千手観音像と二十八部衆像を安置している[47]。鳥羽院政期は大量造像の転換点として注目されるが、考察の対象を彫像、そして千体以上の造像に絞ると、後白河の動向はきわだっている[48]。

後白河院政期のもうひとつの大量造像に、蓮華王院像の供養と同年の長寛二年九月二十二日に東大寺でおこなわれた、公家御祈の普賢延命菩薩像の造像がある。このさい、「丈六絵像」とともに「同摺仏万躰」が供養されている[49]。この公家御祈の主体は二条天皇（一一四三～六五）のはずだが、後白河の関与も指摘されている[50]。導師は興福寺別当の尋範（一一〇一～七四）で、同年十二月十七日の蓮華王院本堂供養でも導師をつとめた人物である。このことは偶然ではあるまい。後白河を核とする人脈のなかで、鳥羽院政期を凌駕する大量造像への欲求が、盛り上がりをみせていたと推測されるのである。

四、蓮華王院千体千手観音像

現在の蓮華王院像は、丈六の坐像を中尊とし、その左右に五百体ずつ等身の立像がならぶ構成をとる。建長元年（一二四九）の火災により、中尊をはじめ当初像の多くをうしなったが、一二四体が残っていることは貴重である。その後、後嵯峨上皇が復興造像をすすめ、文永三年（一二六六）に落慶法要がおこなわれた[51]。千手像の前には鎌倉時代の二十八部衆立像がならぶが、創建期の状況を明確に伝える史料はない。ただし、平安末期の『今鏡』は「天龍八部衆」の存在をしるしており、二十八部衆を意味すると理解される[52]。

千手立像の各像内には、木製の心月輪とともに、数十枚の千手観音二十八部衆像の摺仏が納入されていた。摺仏は四種が知られている。本稿では過去の報告[53]にしたがい、それぞれを（その一）～（その四）と呼び（図3～6）、「長寛摺仏」と総称する。

長寛摺仏の中尊はみな、二手を頭上に掲げて掌上に化仏を乗せる千手観音立像である。鎌倉再興期の像にも摺仏が納入されるが、中尊はおおむね、心覚（一一一七～八〇または八二）撰『別尊雑記』所収「唐本」にもとづいている[54]。二十八部衆は、（その一）のみ千手の手前に風神・雷神と四天王を配する。その他は、すべての二十八部衆が千手の左右にならんで立つ点で共通するが、（その三）は尊種が若干異なる。天蓋や台座の形状はさまざまで、（その四）のみ千手の手前に花瓶を配する。また、（その一）を除く三種には二重の界線による外枠があり、内側を文様帯とする。

図4　千手観音二十八部衆立像摺仏（その2）　妙法院蔵

図3　千手観音二十八部衆立像摺仏（その1）　妙法院蔵

図6　千手観音二十八部衆立像摺仏（その4）　妙法院蔵

図5　千手観音二十八部衆立像摺仏（その3）　妙法院蔵

後白河の千手信仰は熊野信仰の一環として認識されている[55]。千手は熊野結宮の本地仏であり、後白河は熱烈な熊野信仰の延長線上に、千手信仰にたどり着いたというみかたである。ただし、別のきっかけも考えられる。澄憲（一一二六～一二〇三）の唱導を多数おさめる『転法輪鈔』の、「三七ヶ日御逆修」表白[56]に注目してみたい。ここでは後白河の千手信仰について、「千手千眼之尊ハ多年御本尊也、持念既及四十七年、造等身尊容者一千躰之建立安置伽藍者三十五間（中略）一伝本尊霊像御以来毎日勤行全無怠、（後略）」とのべる。後白河は四十七年にわたり千手観音を信仰しており、ひとたび「本尊霊像」を伝えて以来、「毎日勤行」は怠りない、という。「造等身尊容者一千躰之建立」が、蓮華王院像の造立をさすことはいうまでもない。

続く「本尊由来」の段には、阿部泰郎氏も注目するとおり[57]、後白河の千手信仰にかんする興味深い記述がみられる。

（前略）我君ハ久安元年八月廿二日母儀待賢一院御没後中陰五十日以後三井尹（寺カ）僧都道覚号隆明僧正本尊也ト千手観音幷廿八部衆像一鋪進上之彼歳御行年十九歳ノ御年也自彼歳為御本尊御行法于今無退転毎月御所作十八日千手経卅三巻同陀羅尼千反（後略）

この箇所では、生母・待賢門院が久安元年（一一四五）八月二十二日に崩御したさい、園城寺（三井寺）僧の隆明が所持したといわれる千手二十八部衆画像を、おなじく園城寺の道覚から献上されたことを、後白河の千手信仰の出発点としているとしている。後白河の「毎日勤行」のさいの「本尊霊像」とは、この画像を意味するとみてよい。

隆明（一〇一九～一一〇四）は藤原隆家の子で、道隆の孫にあたる。白河法皇の周辺で活躍し、園城寺長吏をつとめ、大僧正に昇進した。三室戸寺に現存する釈迦如来立像は、隆明が裔然請来の清涼寺像を模刻したものである。道覚（生没年不詳）はその弟子である。表白の「千手千眼之尊ハ多年御本尊也、持念既及四十七年」、すなわち、画像の献上からかぞえて持念が四十七年におよんだとの記述は具体的で、信憑性は高いと思われる。後白河は園城寺を篤く信仰しており[58]、「本尊由来」の内容には必然性がある。なお、久安元年から四十七年目は、後白河の最晩年の建久二年（一一九一）にあたる。

隆明は、初の熊野三山検校となった聖護院の増誉（一〇三二～一一一六）の叔父で、みずからも修験に通じたという[59]。この点より、弟子の道覚による画像の献上も、熊野信仰との関係から理解しうるかもしれない。ただし、当時の後白河は十九歳で即位前であり、熊野信仰に没頭した時期よりもかなり若年だった。それを思えば、熊野信仰を基盤として後白河が千手信仰に進んだというより、はじめに千手二十八部衆画像の献上があったとみるほうが自然ではないだろうか。後白河は、くりかえし千手二十八部衆像を造っていた[60]。信仰の根底には、若き日から本尊としてきた、園城寺由来の千手二十八部衆画像への愛着があったのだろう。

蓮華王院の尊像構成と長寛摺仏は、二十八部衆が存在する点で隆明所持の画像と共通する。そのことは、隆明所持の画像を原本として彫像や摺仏がつくられたことを即座に意味するものではない。この画像

の様相はまったくわからないから、現存する彫像や摺仏との図像比較は不可能である。しかし、「千手観音幷廿八部衆像」という枠組みの共通性はみのがせない。後白河の千手信仰が、画像に描かれた具体的なイメージによって喚起されたことを伝える点で、「本尊由来」の記述はきわめて重要である。これを念頭に置くことで、蓮華王院像は後白河による久安元年以来の信仰の集大成として理解される。隆明所持の画像は、蓮華王院の造像において直接の典拠とはならなくとも、信仰的根幹としておおきな役割を果たしたとみることは許されるだろう。

五、摺仏納入と宋風受容

長寛摺仏のおおきな特徴は、千手観音が二手を頭上に高く掲げ、掌上に化仏を乗せる形式である。聖護院本熊野曼荼羅に結宮本地仏として描かれる千手観音像もまた、同様の形式をしめす。石田尚豊氏が注目するように、聖護院本には智証大師円珍像や、円珍に由来する天弓愛染明王像が描かれており、園城寺系の作画であることは確実である[61]。後白河の千手信仰は園城寺僧・隆明所持の画像に触発されたもので、長寛摺仏の千手像が聖護院本の千手像とおなじ形式をとることに矛盾はない。問題は、石田氏がこの形式の千手像を、敦煌やトルファンの諸作例との比較から、中国図像に由来するものと指摘したことである。

長寛摺仏の二十八部衆には、梵天、帝釈天、功徳天、婆薮仙人など、しばしばみられる像とともに、一部に特徴ある像が含まれている。（その一）では、千手観音の手前に風神・雷神と四尊の着甲像が描かれる。この配置は他に例をみない。着甲像のうち一尊は左掌上に塔を乗せることから多聞天とみられ、この四尊は四天王と判明する。各尊が後ろ向きでひざまずくことや、弓矢を執る像などは、日本では類例が少なく、中国由来の図像にもとづく可能性が考えられる。

（その二）～（その四）には、象頭人身の像（図7）が千手の右手の列の最上段に描かれる。同様の像は、文永元年（一二六四）造立の東京・観音寺千手観音菩薩立像の像内に納入された、宋代の作とみられる千手観音二十八部衆摺仏にも存在する。日本の作例に目を向けると、南北朝時代の禅林寺本千手観音二十八部衆像には、象頭の冠をつける像が描かれ、短冊形に「第六五部浄居」の尊名が付される。また、鎌倉時代の個人蔵千手観音二十八部衆像[62]は同様の像を「□魔羅天」としている。彫刻作例では、現在の蓮華王院や東京・観音寺に同様の像がみられ、とくに観音寺像の像内には、文永五年（一二六八）の年紀とともに、「五部浄居」の尊名が墨書される[63]。これらの像は、善無畏（六三七～七三五）訳『千手観音造次第法儀軌』[64]に説かれる、「五部浄居炎摩羅」に該当するとみ

図7　千手観音二十八部衆立像摺仏（その2）
毘奈夜迦　妙法院蔵

られるが、儀軌はその像容を「色紫白、左手持炎摩幢、右手女竿」とのべるのみで、象頭にかんする規定はない。長寛摺仏のように完全な象頭をあらわす例は、彫像では鎌倉時代末期の東京国立博物館二十八部衆面（天野社伝来）に含まれる、かつて「炎魔天」の銘があったとされる面[65]、画像では室町時代（十五世紀）の京都・善峯寺本[66]を挙げうるが、稀少といえる。

濱田瑞美氏は、莫高屈第一四八窟（盛唐）や榆林窟第三六窟（五代）など、敦煌壁画の千手千眼観音変に象頭人身の毘奈（那）夜迦、すなわち歓喜天が描かれることを指摘している[67]。また、ギメ美術館に所蔵される二点の千手千眼観音菩薩図にも、象頭人身の像がみられる。とくに、五代・天福八年（九四三）本では、この像に「毘那耶歌」の名称が付されている（図8）[68]。こうした作例から、摺仏（その二）～（その四）にみる象頭人身像もまた、毘奈夜迦であると考えられる。敦煌の毘奈夜迦は明王に付随する存在だが、画像全体の中尊である千手観音の眷属としての地位を獲得し、二十八部衆の一尊に成長したのではないだろうか。（その一）にみる異形の四天王像と同様、象頭の毘奈夜迦は（その二）～（その四）のおおきな特色となっている。いまだ類型化のみられない二十八部衆像の存在は、長寛摺仏が中国画をもとに制作された可能性を想起させる。

宋代の千手二十八部衆像の様相は、『別尊雑記』「千手」所収の「唐本」から推測される。本図像は「私追加之」の注記から、撰者の心覚が知りえた唐本図像を「私に」『別尊雑記』に加えたことが判明する。「唐本」とあるが、裙裾のちりちりと波打つ衣褶線などから、じっさいには宋代図像の写しとみられる。これとともに注目すべき作例に、さきにふれた観音寺千手観音像の納入摺仏（図9）がある。本摺仏の右上には開版地とみられる「清水寺」の文字がある。光背のように広がったおびただしい脇手を稠密に描き出す点は、南宋初期（十二世紀半ば）の台北故宮博物院本[69]、宋風が顕著な鎌倉時代の広島・耕三寺本や幽玄斎本[70]と類似する。複雑な図容を彫出する技術は高く、宋代摺仏の貴重な現存作例とみなされよう。板木の摩滅により像容は不分明だが、千手観音の両脇には二十八部衆が従っている。これら二作例の存在から、長寛摺仏が制作される前提として、宋代の千手二十八部衆像が請来されていた事実がうかびあがってくる。

長寛摺仏の粘り強く、引き締まった均質な版刻線は、北宋・雍熙元年（九八四）の清涼寺弥勒菩薩坐像摺仏をはじめとする、宋代作例を範と

図8　千手千眼観音菩薩図　毘那耶歌　ギメ美術館蔵

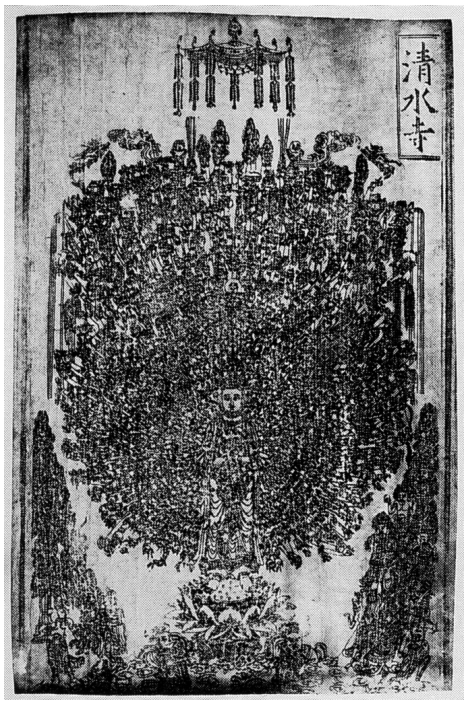

図9　千手観音二十八部衆立像摺仏　観音寺蔵

するものとみてよい。図容は緻密で、千手観音の微細な頭上面、重なり合う脇手とそれぞれの手に執られる持物、とくに（その一）（その二）の裙裾にみられる重層的な衣のひだの表現は的確である。二十八部衆は密集して居並ぶが、各尊の像容は周到に描き分けられ、お互いの位置関係のバランスもよく計算されているため、個々の存在がきわだち、独立した尊像としても鑑賞に堪える。総じて長寛摺仏は下絵の描写力、そして彫・摺の技法とも非常に高度で、中国摺仏の特性を深く理解した工人の手によるものとみてまちがいない。

全体の構成では、二重の界線による外枠の存在が注目される。中国摺仏はこうした外枠をもつものが多く、それらを日本で筆写した白描図像にも外枠が描かれている[71]。（その二）～（その四）の外枠の唐草文も、中国摺仏に一般的な要素である。（その四）の外枠には独鈷杵が描かれている。中国作例では、五代～北宋初期のギメ美術館本千手千眼観音菩薩坐像摺仏に独鈷杵、清涼寺弥勒摺仏に五鈷杵がみられるほか、呉越国王銭俶（銭弘俶、九二九～八八）「印造」の摺仏を筆写した、大東急記念文庫本応現観音図像にも三鈷杵が描かれる。応現観音図像の原本となった摺仏は北宋・開宝七年（九七四）の開版である可能性が高く[72]、北宋初期の摺仏の様相を伝える実作例として重要性が高い。これらと比較することで、長寛摺仏は中国摺仏の様式および形式をよく伝えていることがわかる。その制作過程は、請来図像を下絵とし、摺仏の様式・形式に倣って版画化するか、あるいは摺仏をそのまま模刻するかのいずれかとみられる。長寛摺仏のなかに、中国摺仏の模刻が含まれている可能性も考えてよいだろう。

平安時代後期には、「唐摺本」「唐本曼荼羅摺本」などの文言が諸史料にあらわれ、中国版画の受容が進んでいたことがうかがえる[73]。とくに、十二世紀のニューヨーク公立図書館本仁王経曼荼羅図像には「唐摺本云々」の注記があり、請来摺仏の写しである可能性をしめすとともに、当時の人々が「唐摺本」という概念をいかにとらえていたかを具体的にものがたっている。細勁な墨線、複雑な図様を的確に造形する描写力は、長寛摺仏にも共通する要素といえる。中国摺仏の諸要素をよく継承する長寛摺仏が、「唐摺本」の範疇に入るものと認識されていたならば、蓮華王院像を内側から宋風化する役割を期待されたものと理解することが可能だろう。さらに、摺仏の像内納入という信仰形態じたいが、北宋の先例を追うものだったことは、清涼寺釈迦像の存在からあきらかである。

蓮華王院像は千体造像という点において、得長寿院像の延長線上に位置するが、類似点はそれのみではない。得長寿院像は像内に「千体小仏」を納入していたといい、その点でも蓮華王院像の前提と位置づけられる[74]。蓮華王院の各像には、数十枚の千手観音二十八部衆像の摺仏が納入されていた。つまり、摺仏にあらわされた千手観音像を加えれば、堂全体でその数は数万体に達するのである[75]。等身像を千体ならべるために必要な堂宇の規模は、現在の三十三間堂が雄弁にものがたっており、等身像による一万体造像は実現不可能に近いといわざるをえない。しかし、「小仏」や摺仏を納入すれば、一万体造像は可能となる。斎然が伝えた「一万文殊」の記憶は、平安末期には薄れていたと思われるが[76]、待賢門院の不動明王画像制作のように、一万体造像の系譜は連綿と続いていた。また、同年の普賢延命「摺仏」一万体の制作からも知られるように、後白河の周辺では版画がたしかに注目されていた。大量造像の究極のかたちとして、摺仏を含めた一万体造像を、稀代の傑物・後白河が意識していた可能性は捨て切れない。

おわりに

蓮華王院像のふたつのキーワードである、大量造像と摺仏の像内納入を宋風受容とみなすとき、その推進力として、後白河の宋代仏教への傾倒ぶりが注目される。嘉応～承安（一一六九～七五）ごろ、後白河は明州の阿育王山舎利殿建立に協力し、材木を寄進した[77]。養和元年（一一八一）と文治元年（一一八五）には、阿育王信仰にもとづく八万四千塔を造立している[78]。さらに寿永元年（一一八二）には、臨安（杭州）霊隠寺の住持だった仏海禅師慧遠を天台座主として招聘するという、驚くべき構想を抱いたのである[79]。崩御前年の建久二年には、清涼寺釈迦像を礼拝するとともに、模刻をおこなっていることが『転法輪鈔』所収の結願表白から知られる[80]。

この表白は、後白河を梁の武帝（四六四～五四九）になぞらえる意識があらわれていることでも注目される。九条兼実（一一四九～一二〇七）もまた、後白河崩御にあたって「帰依仏教之徳、殆甚於梁武帝」と評している[81]。後白河による旺盛な宋代仏教文化の摂取は、崇仏の皇帝として知られる梁武帝との同一視を原動力としていたのではないだろうか。みずから出家し、仏教の内護者としての顔をもちあわせた後白河にとって、「梁武帝の再来」の称号はなによりの賞賛だっただろう。

註

(1)『百錬抄』同日条。以下、『百錬抄』は『新訂増補国史大系』本を使用した。
(2)奥健夫『清涼寺釈迦如来像』（『日本の美術』五一三）至文堂、平成二十一年。
(3)田中教忠『蓮華王院三十三間御堂考』田中忠三郎、昭和七年。
(4)『中右記』長承元年（一一三二）三月九日条。以下、『中右記』は『増補史料大成』本を使用した。
(5)丸尾彰三郎「史実篇」（『蓮華王院本堂千躰千手観音像修理報告書』妙法院、昭和三十二年）。
(6)内田隆子「千体仏について―千仏・印仏・千体仏―」（『近畿地方における千体仏の基礎的調査』㈶元興寺文化財研究所、昭和五十七年）、宇野茂樹「蓮華王院―御堂と千躰仏―」（古代学協会編『後白河院　動乱期の天皇』吉川弘文館、平成五年）、武笠朗「平清盛の信仰と平氏の造寺・造仏（上）・（下）」（『実践女子大学美学美術史学』一三・一四、平成十・十一年）、同「蓮華王院長寛造像の研究（一）

―創建の経緯と造立仏師の検討―」（『実践女子大学美学美術史学』二一、平成十九年）ほか。

(7) 速水侑『平安貴族社会と仏教』吉川弘文館、昭和五十年。

(8) 毛利久「三十三間堂の彫刻―草創と再興―」（山根有三ほか『日本古寺美術全集』二五　三十三間堂と洛中・東山の古寺、集英社、昭和五十六年）。

(9) 上川通夫「中世仏教と「日本国」」（『日本史研究』四六三、平成十三年。同『日本中世仏教形成史論』校倉書房、平成十九年、所収）。

(10) 註2奥氏書。

(11) 『新訂増補国史大系』二七。

(12) 上川通夫「奝然入宋の歴史的意義」（『愛知県立大学文学部論集　日本文化学科編』五〇、平成十四年。同『日本中世仏教形成史論』校倉書房、平成十九年、所収）。

(13) 『大正蔵経』九―五九〇ａ。

(14) 『大正蔵経』一〇―二四一ｂ。

(15) 頼富本宏「五台山の文殊信仰」（『密教学研究』一八、昭和六十一年。頼富本宏編『密教大系』一〇　密教美術Ⅰ、法蔵館、平成六年、所収）。

(16) 五台山のほか、唐代の大暦二年（七六七）には、不空が長安化度寺の護国万菩薩堂を開いていることが、『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』（『大正蔵経』五二―八三四ｃ）から知られる。中田美絵「五台山文殊信仰と王権―唐朝代宗期における金閣寺修築の分析を通じて―」（『東方学』一一七、平成二十一年）、高瀬奈津子「中唐期における五台山普通院の研究―その成立と仏教教団との関係―」（『札幌大学総合論叢』三六、平成二十五年）参照。

(17) 日比野丈夫・小野勝年『五台山』（『東洋文庫』五九三、平凡社、平成七年）。なお、現存する五台山顕通寺銅殿（明代）の堂内壁面には、浮彫の万仏坐像があらわされるが、千仏と同様の如来形である。

(18) 『大正蔵経』四九―三九七ｃ。

(19) 『平安遺文』九、№四五六七。奝然の入宋時の動向にかんしては、註12上川氏論文および註2奥氏書を参照。

(20) 「一万文殊」の用例は、高麗の一念（一二〇六～八九）撰『三国遺事』の月精寺にかんする記事にもみられる（『大正蔵経』四九―九九八ｃ、九九九ａ）。『続左丞抄』所引官符案と同様、中国の国外で「一万文殊」の概念が存在していた形跡として興味深い。松本真輔「菩薩の化現・現相―中国五台山の文殊菩薩化現信仰と朝鮮王朝世祖代における如来・菩薩の現相―」（藤巻和宏編『聖地と聖人の東西―起源はいかに語られるか―』勉誠出版、平成二十三年）参照。

(21) 泉武夫「愛染王法と千体画巻」（『學叢』二二、平成十二年。同『仏画の尊容表現』中央公論美術出版、平成二十二年、所収）。

(22) 上川通夫「大治年間の造寺造仏事業」（『愛知県立大学文学部論集　日本文化学科編』五六、平成十九年）。

(23) 『大正図像』一二―三一七ｂ。本願文をとりあげた論考に、工藤美和子「忠を以て君に事へ、信を以て仏に帰す―一〇～一一世紀の願文と転輪聖王」（同『平安期の願文と仏教的世界観』思文閣出版、平成二十年）がある。

(24) 『日本紀略』正暦五年二月二十日条。以下、『日本紀略』は『新訂増補国史大系』本を使用した。

(25) 『新訂増補国史大系』一二。

(26) 古瀬雅義「『枕草子』積善寺供養章段の構成―時間軸の不統一とモザイク的様相」（『国文学攷』一八七、平成十七年）。

(27) 以下、『公卿補任』は『新訂増補国史大系』本を使用した。

(28) 以下、『小右記』は『大日本古記録』本を使用した。

(29) 『日本紀略』同日条ほか。荒木計子「奝然将来の五台山文殊の行方」（『学苑』六六八、平成七年）参照。

(30) 註29荒木氏論文。手島崇裕氏は、本像が太宗勅願の金銅万菩薩像の一体である可能性を説く。非常に興味深い見解だが、本像は騎獅文殊像だったことが小島裕子氏によって指摘されており、群像である眷属像の一体とみることはむずかしい。手島崇裕「入宋僧と三国世界観―その言動における天竺と五臺山」（『歴史の理論と教育』一二九・一三〇、平成二〇年。同『平安時代の対外関係と仏教』校倉書房、平成二十六年、所収）、小島裕子「五台山文殊を語う歌―『梁塵秘抄』より、嵯峨清涼寺奝然の五尊文殊請来説を問う―」（真鍋俊照『仏教文化と歴史文化』法蔵館、平成十七年）参照。

(31) 一切経の受容と展開については、上川通夫「一切経と中世の仏教」（『年報中世史研究』二四、平成十一年。同『日本中世仏教史料論』吉川弘文館、平成二十年、所収）を参照。

(32) 三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』続群書類従刊行会、平成十二年、五〇五頁の表を参照。
(33) 奝然と実資の交流については、荒木計子「入宋僧奝然と清涼寺建立の諸問題(下)—帰国後の奝然と義蔵の行動—」(『学苑』四九二、昭和五十五年)を参照。
(34) 註33荒木氏論文、石井正敏「入宋巡礼僧」(荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史』V　自意識と相互理解、東京大学出版会、平成五年)。
(35) 『日本紀略』同日条。
(36) 『御堂関白記』同日条(『大日本古記録　御堂関白記』中)。
(37) いずれも『小右記』同日条。
(38) 以下、『左経記』は『増補史料大成』本を参照した。
(39) 『左経記』同日条。
(40) 『小右記』同日条。
(41) 註31上川氏論文。
(42) いずれも『水左記』同日条(『増補史料大成』八)。
(43) いずれも『殿暦』同日条(『大日本古記録　殿暦』二)。
(44) 『中右記』同日条。この事例は、おもに摂関家が主導してきた一万体造像に、院権力が参入したことをしめす点でも重要である。
(45) 根立研介・副島弘道「千手観音像　妙法院　一　中尊(千手観音菩薩坐像)」(水野敬三郎編『日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代　造像銘記篇』八、中央公論美術出版、平成二十二年)。
(46) 『山槐記』平治元年二月二十二日条(『増補史料大成』二六)。
(47) 『百錬抄』同日条。『粉河寺縁起』は中尊を三尺像とする。三崎義泉「妙法院・三十三間堂、その信仰の歴史」(宇佐見英治・三崎義泉『古寺巡礼　京都』一四　妙法院・三十三間堂、淡交社、昭和五十二年)参照。
(48) 承安二年(一一七二)三月十五日、後白河と清盛は福原で千僧供養をおこなった(『百錬抄』同日条)。『古今著聞集』によれば、このさい仏一千体が置かれたという。これが事実ならば、清盛主導の事業だったことは考慮すべきだが、後白河関連の千体造像に加えられることになる。註6武笠氏論文(平成十年)参照。
(49) 中島俊司編『醍醐雑事記』醍醐寺、昭和四十八年、三四八頁。
(50) 森由紀恵「後白河院と法勝寺千僧御読経」(『古代学』四、平成二十四年)。「摺仏」の制作については、拙稿「仏教版画の呼称について」(『町田市立国際版画美術館紀要』一五、平成二十三年)参照。
(51) 蓮華王院の歴史と千体千手像の概要については、丸尾彰三郎「千手観音菩薩像　妙法院」(丸尾彰三郎ほか編『日本彫刻史基礎資料集成　平安時代　造像銘記篇』八、中央公論美術出版、昭和四十六年)、註45水野氏編書を参照。
(52) 註47三崎氏論文。
(53) 註51丸尾氏解説。
(54) 『大正図像』三—二一〇。
(55) 中野玄三「千手観音像(長寛仏)」(註47宇佐見・三崎氏書)、註6武笠氏論文(平成十九年)ほか。
(56) 永井義憲・清水有聖編『安居院唱導集』上巻、角川書店、昭和四十七年、二四七～二四八頁。
(57) 阿部泰郎「唱導と王権—得長寿院供養説話をめぐりて—」(水原一編『伝承の古層—歴史・軍記・神話—』桜楓社、平成三年)。
(58) 松本公一「後白河院の信仰世界—蓮華王院・熊野・厳島・園城寺をめぐって—」(『文化史学』五〇、平成六年)、註6武笠氏論文(平成十九年)。
(59) 関口力「中関白家と熊野—隆家と増誉を中心として—」(『国学院雑誌』八〇〈一〇〉、昭和五十四年。「中関白家と熊野」と改題、同『摂関時代文化史研究』思文閣出版、平成十九年、所収)。
(60) 註47三崎氏論文。
(61) 石田尚豊「熊野曼荼羅(聖護院蔵)」(『MUSEUM』一三二、昭和三十七年。同『日本美術史論集—その構造的把握—』中央公論美術出版、昭和六十三年、所収)。
(62) 町田市立国際版画美術館『版になった絵・絵になった版—中世日本の版画と絵画—』展図録、平成七年、図版№74。
(63) 山本勉「二十八部衆像　観音寺」(水野敬三郎編『日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代　造像銘記篇』一〇、中央公論美術出版、平成二十六年)。
(64) 『大正蔵経』二〇—一三八b。
(65) 伊東史朗『八部衆・二十八部衆像』(『日本の美術』三七九、至文堂、平成九年)はこの名称を『千手観音造次第法儀軌』に説かれる「五部浄居炎摩羅」にあたるものと指摘する。

(66) 短冊形には「満善車鉢羅」の尊名が書かれるが、後補とみられる。
(67) 濱田瑞美「敦煌唐宋時代の千手千眼観音変の眷属衆について」（『奈良美術研究』九、平成二十二年。「敦煌唐宋時代の千手千眼観音変」と改題、同『中国石窟美術の研究』中央公論美術出版、平成二十四年、所収）。
(68) 秋山光和「96　千手千眼観音菩薩図」（ジャック・ジエス編『西域美術　ギメ美術館　ペリオ・コレクション』一、講談社、平成六年）。
(69) 井手誠之輔「千手千眼観音像軸」（嶋田英誠・中澤富士雄責任編集『世界美術大全集・東洋編』六　南宋・金、小学館、平成十二年）。
(70) 幽玄斎「千手観音像」（富山美術館『仏教絵画　幽玄斎　選』図録、昭和六十一年）。
(71) 内田啓一「宋請来版画と密教図像―応現観音図と清涼寺釈迦像納入版画を中心に―」（『仏教芸術』二五四、平成十三年。同『日本仏教版画史論考』法藏館、平成二十三年、所収）。
(72) 増記隆介「紙本白描応現観音図について―その原本の絵画史上の位置―」（『かがみ』四二、平成二十四年。「紙本白描応現観音図」と呉越国」と改題、同『院政期仏画と唐宋絵画』中央公論美術出版、平成二十七年、所収）。
(73) 註71内田氏論文、註50拙稿。
(74) 註6武笠氏論文（平成十九年）。
(75) 菊竹淳一「個人と国家の作善業―平安の仏教版画」（中野政樹ほか編『日本美術全集』七　曼荼羅と来迎図、講談社、平成三年）。
(76) 建仁二年（一二〇二）に脩明門院藤原重子が熊野に参詣したさいの表白には、「一万十万文殊普賢也」の文言がある（註56書、二七五頁）。「一万」とは熊野十二宮のうちの一万宮で、文殊菩薩を本地仏とする。本表白では、「清涼山」に「一万菩薩」が住むとの認識もしめされているものの、「一万」がほんらいの意味から発展し、文殊の垂迹形とされている点が注目される。
(77) 藤田明良「南都の「唐人」」（『奈良歴史研究』五四、平成十二年）、渡邊誠「後白河法皇の阿育王山舎利殿建立と重源・栄西」（『日本史研究』五七九、平成二十二年）。
(78) 皿井舞「勧進と結縁の思想的背景―『覚禅鈔』造塔法を手掛かりとして―」（覚禅鈔研究会編『覚禅鈔の研究』親王院堯榮文庫、平成十六年）。
(79) 註77渡邊氏論文。
(80) 註56書、二三二～二三三頁。後白河の清涼寺釈迦像礼拝と模刻については、皿井舞「日本彫刻史における金泥塗り技法の受容について」（『仏教芸術』二七三、平成十六年）、奥健夫「生身信仰と鎌倉彫刻」（山本勉責任編集『日本美術全集』七　運慶・快慶と中世寺院、小学館、平成二十五年）を参照。
(81) 『玉葉』建久三年三月十三日条（国書刊行会編『玉葉』三、名著刊行会、昭和四十六年）。上川通夫「後白河院の仏教構想―寺院法と手印―」（註6古代学協会編書）。

年表　平安時代における同一尊の大量造像（千体以上）

本年表は註21泉氏論文、註22上川氏論文所収の年表、林温「千体地蔵菩薩図について」（『仏教芸術』241、平成10年）註31をもとに、若干の事項を加えたものである。制作にあたっては、東京大学史料編纂所ＨＰのデータベースを参照した。
本来的に多数尊の造像を必要とする、あきらかに千仏または三千仏の制作とわかる事例と、仁王会に関する造像は除いた。

年月日	事項	出典
正暦5年（994）2月17日	藤原道隆、積善寺で釈迦如来画像一万体を供養。	門葉記、扶桑略記
寛弘2年（1005）3月22日	藤原実資、不動明王像一万体を図絵。	小右記
寛弘7年（1010）3月21日	行円、行願寺で「三千余体仏像」（または「千躰仏」）を図絵。	日本紀略、御堂関白記
治安3年（1023）閏9月18日	藤原実資、薬師如来像一万体を造像。	小右記
万寿5年（1028）7月1日	後一条天皇、中宮威子御産御祈の五天画像各一万体を発願。	小右記
承保4年（1077）8月19日	源俊房、仏師良仁に十一面観音像三千余体を図絵させる。中尊は一搽手半像、その他は約一寸。	水左記
承保4年（1077）8月20日	源俊房、仏師良仁に延命菩薩像三千余体を図絵させる。中尊は一搽手半像、その他は約一寸、一万体を奉る願あり。	水左記
承保4年（1077）8月30日	源俊房、延命菩薩像六千余体を供養。20日に供養した三千余体とともに一万体に満ちる。	水左記
嘉保3年（1096）2月1日	維範、不動明王像万体を摺写。	拾遺往生伝
長治2年（1105）7月7日	藤原忠実、半丈六愛染明王彫像を造り始め、愛染明王画像万体を図絵。	殿暦
長治2年（1105）10月16日	仏師院助が半丈六愛染明王彫像の頭部を、絵仏師範順が愛染明王画像万体を藤原忠実に渡す。	殿暦
長治2年（1105）	この年の年紀をもつ阿弥陀如来坐像印仏（浄瑠璃寺阿弥陀如来坐像納入品、通称「十二体一版」）あり。同像納入品の阿弥陀如来坐像摺仏（通称「百体一版」）を加え、総計数万体に達したか。	個人蔵「十二体一版」付属紙縒墨書
嘉承元年（1106）2月27日	藤原忠実、愛染明王像万体を供養。	殿暦
天治元年（1124）5月27日	鳥羽上皇、不動明王画像千体を供養。中尊は丈六像。	永昌記
大治2年（1127）7月14日	白河法皇・鳥羽上皇・待賢門院、不動明王像（彫像か）百体および不動明王画像千体を供養。	中右記
大治4年（1129）7月18日	待賢門院、千手観音像百体（「或いは造立、或いは図絵」）を供養。また不動明王画像千体および丈六像一体を供養、この日より十日で万体を供養。	中右記
大治4年（1129）7月20日	待賢門院、「仏像」百体を供養、この日より十日で千体を供養。	長秋記
大治4年（1129）閏7月18日	藤原為隆、宝寿院にて不動明王像万体を摺写供養。	永昌記
大治5年（1130）6月12日	鳥羽上皇、等身釈迦如来像千部（体カ）を供養。	中右記
天承元年（1131）10月10日	鳥羽上皇、法勝寺で等身聖観音像千体を造り始める。	平時信記
長承元年（1132）2月28日	「白河院御願千体観音」を「御堂」に安置。	中右記
長承元年（1132）3月9日	鳥羽上皇、白河得長寿院観音堂を供養。丈六正（聖）観音坐像および等身正観音立像千体を安置、像内に「千体予（小カ）仏」を納入	中右記
久安3年（1147）	道寂、この年までに一搽手半観音像一千体を造立。	本朝新修往生伝
久安3年（1147）11月30日	鳥羽法皇、阿弥陀如来像一千体を図絵。	本朝文集
久安6年（1150）7月8日	鳥羽法皇、法勝寺で延命木像千体を供養。	台記、本朝世紀
久安6年（1150）10月7日	鳥羽法皇、阿弥陀如来像千鋪を図絵。	本朝文集
仁平元年（1151）6月13日	覚法法親王、高野山金堂で一尺阿弥陀如来坐像千体を供養。	高野春秋
仁平元年（1151）8月4日	鏡祐、釈迦三尊像千体を造立、供養。	豊楽寺薬師如来坐像像内墨書
仁平2年（1152）9月20日	康慶作の五尺吉祥天彫像を供養、像内に吉祥天像三千十体を「写摺」し納入。	吉祥天像納入経巻奥書
仁平2年（1152）12月18日	鳥羽法皇、三尺金色阿弥陀像千体を造り始める。	本朝文集
仁平3年（1153）7月	鳥羽法皇、阿弥陀如来像一千体を図絵。	本朝文集
久寿元年（1154）6月8日	藤原頼長、鳥羽法皇のために等身薬師如来坐像と五寸薬師如来立像千体を供養。	台記
久寿元年（1154）6月8日	藤原忠通、実厳に五十箇日の不空羂索法を修させ、この日結願。不空羂索観音の「印仏」三千五百体を「奉摺」。	巻数集
平治元年（1159）2月22日	後白河上皇、白河阿弥陀堂を供養、三尺阿弥陀如来像千体を安置。	山槐記
応保2年（1162）3月7日	中川寺旧蔵毘沙門天立像（現・東京国立博物館蔵）納入品の毘沙門天立像印仏を供養、紙背に「千躰内」の墨書あり。	印仏紙背墨書
長寛2年（1164）9月22日	東大寺大極殿で公家御祈の万僧供養がおこなわれ、丈六延命菩薩画像と延命菩薩「摺仏」万体を供養。	醍醐雑事記
長寛2年（1164）12月17日	後白河上皇、蓮華王院本堂を供養、千手観音像（丈六坐像とみられる）および等身千手観音千体を安置。等身像の像内に千手二十八部衆摺仏を納入。	百錬抄
仁安2年（1166）2月19日	藤原邦綱、故摂政近衛基実のために釈迦如来画像千体を供養。	山槐記
承安2年（1172）3月15日	平清盛と後白河法皇、千僧を供養。道場に仏像一千体を安置したという。	玉葉、古今著聞集
安元2年（1176）4月2日	後白河法皇、法住寺殿内の持仏堂を供養、千手観音像千一体と二十八部衆像を安置。	吉記、百錬抄
治承元年（1177）8月13日	勝賢、嵯峨の地蔵堂を供養。三尺地蔵菩薩像を安置し、像内に「千体尊容」を納入。	国立歴史民俗博物館本『転法輪鈔』※
治承3年（1179）11月28日	覚音寺千手観音立像供養。納入品の千手観音立像印仏のうち一紙に「四十九枚」の墨書あり、印仏は一紙につき三十体を捺す。	印仏紙背墨書

※山崎誠「「転法輪鈔」繫年考」（『国文学研究資料館紀要　文学研究篇』33、平成19年）参照。